

## 普悦筆阿弥陀三尊像について

泉武夫（東北大学）

京都・清浄華院蔵の阿弥陀三尊像三幅は、南宋仏画の優品として知られている。各幅上端に「四明普悦筆」の落款があることから、作者名が知られる点でも貴重である。しかし、制作年代や制作背景などについての専論はなく、なお研究の余地を残している。

様式史的には、北宋末における李公麟の白描画の復興を承けた線描の見事さ、裏彩色を併用した薄手の賦彩と精妙なグラデーションによる写実的形象、無背景でありながら臃な舟形光背によって現出される夢幻的な空間表現などが、その特質とみなされる。また諸所に金泥描という仏画の装飾的媒体を用いながら、自然主義的イリュージョンを妨げないように抑制的に使用する美意識が、南宋画院の絵画のそれに通じるとも指摘されている。

画僧と思われる作者普悦は、このようにきわめて創造的な作風を見せながら、じつは型を用いた画工的な要素を持ち合わせていることが今回明らかとなった。脇侍の観音と勢至とは反転像であり、先に観音の紙形があり、これを反転して勢至が作られたと考えられるのである。いきおい観音の服制は保守的であり、勢至はより革新的という対照性を示す。だとすれば、普悦は画院画家的な美意識と仏画師的な感性の両方を持ち合わせているという性格が、新たに浮彫になる。制作年代の上限として画院の復興（1146頃）を想定する必要は薄れるだろう。制作時期としては、顔の眼の形状や表情の厳しさなどから、永保寺千手観音像に先行する一二世紀半ばから後半にかけてと考える。

図像の面では、中尊阿弥陀がいわゆる逆手来迎印をとる立像である点が特色となる。これは五代ころに創始され、宋代に流布した図像形式であり、南宋後半の諸例では足下に乗雲を伴う来迎像が多くなる。しかし早期の例では本図を含めて乗雲がなく、観想像としての性格が強い。その宗教的解釈については、宋天台の四明知礼（960-1028）による唯心浄土説に基づくという井手誠之輔氏の説がいまのところ唯一有効な論である。ただ、知礼の考え方は阿弥陀の真身観にのみ集約する特徴があり、本作品のような三尊像の思想的背景には一致しない憾みがある。むしろ知礼の説を承けながら、三尊一具にも重要な意義を認める元照（1048-1116）の考え方に基づく感見像と解釈する。

伝来については、室町将軍家コレクション中にあった普悦画との関係がとりざたされているが、現時点では明証がない。旧箱書にあった当寺四三世良故（1646着任、1661退任）の修理銘が、最古の資料で、元文2年（1737）の『元文二江戸開帳日鑑』に清浄華院の什物として出て来る以前の様子はわからない。ただ当寺には天文3年（1534）着賛の山越阿弥陀像があり、その像容と色調からは本作品を摸した翻案像とみられることから、室町後期には当寺に奉安されていた可能性が高い。ここまでは伝来が遡れるのである。